

白金霞

10月号



祝富士山百句



平成29年10月発行

第80号

白金蔭定例会案内（於て アビスタ）

十一月十七日（金）正午～三時第五兼題…石路の花、木の葉
十一月三十日（木）ゴッホ展一時～五時東京文化会館
十二月十五日（金）正午～三時第五兼題…マスク、人参
一月一五日（金）正午～三時第五兼題…新年一般

兼題句参考句（11月17日分 石路の花、木の葉）

ろうかんをくだく白波石路の崖

石原八束

海見えぬ崖に綬をなす石路の花

横山白虹

石路黄なり灯台の子の椅子机

山口誓子

水底の岩に落ちつく木の葉かな

丈草

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉

芭蕉

木の葉飛ぶ生なきものの軽さにて

六谷千代子

月例句会報（17／10／20 9名欠4

朝顔の実、鶉）

飯田孝三

ぼんぼりの種とる朝顔は団十郎

鶉その卵しか知らず芳紀二十四

「小諸百句」カルタ土産に柿の秋

戦後の祖国を捨てし人あり美術の秋

朝顔も實がちに澤東綺譚の町

増田陽一

ひと夏の朝顔の蔓巻き戻す

もの言はぬ秋の揚羽と擦れ違ふ

梨転げ全天に雲動きけり

眉著き鶉ぞはやも渡り来し

シベリアの空見返りて初鶉

光成高志

鶉見てゐる「だるまさんがころんだ」

実の朝顔垣に絡まる共稼ぎ

木曾谷や稲架に小蓑の青シート

秋天に榎大樹が枝を張る

体育祭裸の騎士が組み合へる

光 みち

歩いてはペンギン立ちの鶉かな

道辺の朝顔の種失敬す

紅葉狩蕎麦巻きずしの弁当持

みはるかす手賀の田圃を飛ぶ鶉

いりあひの蜂の群がる野菊かな

松村幸一

あさがほと母の細書き封筒に
残り蚊や英字新聞にて果てり

もつと心入れて吹かねばひよんの笛

浅野正美

賑はしく来てぼつねんと鵜かな

長き夜の生命線と感情線

咲き終えて朝顔の実は同じ色
コスモス園行き交ふ人と声交す

藤棚に鬼の泪の実が垂りぬ

草食めるニホンカモシカ秋彼岸
鵜鳴く仲間呼びよせねぐらなり

朝顔が実となるまでの恋なりし

鵜群れ飛び来て留まる電線に

庭駆ける鵜に朝の光満つ

吉羽多美子

武者昭七

朝顔の花のみ賞でて種こぼす

山の寺の鐘の鳴る間の静寂かな

初孫の婚約を聞く良夜かな

天を突くスカイツリーや鳥渡る

秋の空渦巻く雲となりて暮る

鳥渡る茜の雲と赤富士と

何もせぬひと日は長し秋夕焼

朝顔の実の弾けては草に入る

倉田紀子

手を握^とつて交はす眸や鳥渡る

彫深き雨情の句碑や鵜来る

磯目健二

朝顔の種のいくつか飛驒格子

海越えて加賀へ鵜の群来かな

鳥向ふ円空の里秋の暮

峽の峰鵜の毘を見張る小屋

村老は鵜の美味を倦まず説く
朝顔の実が風に落つ垣根かな
朝顔や色即是空実へ転生

焼鳥の鵜は旨しもう一杯

くろがねの車輪をでんと美術展
木犀の樹下秀才を組み伏せり
志賀直哉旧居どんぐりころりころ
朝顔の種採る梯子継ぎ足して

雑草の中で生き抜く朝顔の実
蒔かぬのに今年も咲きて白朝顔
朝顔の蔓をカットしている妻
朝顔の実に包まれて紺眠る
むかご飯塩あんばいの日和かな
朝顔の実に託したる明日かな

佐藤宏之助

青木啓泰

仲本興正

シベリアへつながらる空や鵜来る
友送り帰る歩道やそぞろ寒
うそ寒のことば少なき土手の道
やや寒の行列にゐる昼餉刻

田宮敦子

朝顔の実赤紫を封筒に
石仏や薄がおいでおいでして
櫨の実や古人いにしえびとを味はえり
誰も居ぬ子規の球場秋の雲
鵜ゐてマザーグースを読みかえす

一句鑑賞

光成高志

咲き終えて朝顔の実は同じ色
中七が六音でしたので七音に直し鑑賞します。花が
萎みその子房が膨らんで実をつける。その朝顔の実が
同じ色であるという句です。それでどうしたと云われ
そうです。花の色は色々でも実になったならば同じ緑
色になるというのは朝顔の実の実態です。ここにメカ
ニズムがあるのです。実の中の種も同じ色ですね。

正美

歩いてはペンギン立ちの鵜かな

みち

鵜の歩きぶりの特徴をペンギン立ちとしたところが
みちさんらしい。私は「だるまさんがころんだ」の遊
びの歩きぶりにそっくりと思いますが、すくつと一瞬
立って胸を張り遠くを見る鵜、それを繰り返すのがユ
ーモラス且可愛いのです。

峡の峰鵜の罖を見張る小屋

健二

即「淋しさに又銅鑼打つや鹿火屋守」(原石鼎)を思
い出した。峡の峰にて鵜の罖を見張る小屋があると書
いてありますが、小屋の中で罖を見張る人を省略して
いるのでしょうか。山峡に突つ張つた峰があつて下の谷
から飛んで来る鵜を捕獲する罖を見張るという光景は
やはり石鼎の心情と近似するでしょう。罖は霞網であ
ろうと思われませんが、今は禁止されています。

賑はしく来てぽつねんと鵜かな

幸一

鵜は群れでシベリアから飛来して単独で行動します。
それを「ぽつねんと」と表現されたところに幸一さん
の個性が出ています。鵜に聞いた訳ではありませんが、
別にぽつねんと寂しそうにしているのではないでし
ょうが、作者にはそう見えたのでしょう。実際は地面
の餌を探すのに又天敵を警戒して、歩いては止まりま
た歩いては止まる行動をしているのです。鵜に感情移
入して鵜の生きざまを表現した佳句と思います。

志賀直哉旧居どんぐりころりころ

宏之助

志賀直哉旧居の庭に団栗が不意に落ちてころりころ
ろがりころと止つたのです。我孫子は国分寺崖線と同
じような地形であり、崖下にこの旧居がある。庭は泥
岩が露出していて団栗が落ちると跳ね返り転がるのだ。
沼が埋め立てられて後退し、どんぐりころりころどん
ぐりことはいかなくなつたが、このオノマトペが文豪へ
の引いては我孫子への挨拶として面白いと思います。

一句鑑賞

磯目健二

歩いてはペンギン立ちの鵜かな

みち

九月号の兼題参考句「鵜つぐみ枯れ土手を歩み胸を
張る」に通じる鵜の意気軒昂でユーモラスな姿態を捉
えている。小鳥へ向ける暖かい目がいい。

シベリアのつながる空や鵜来る

興正

中七「シベリアの空や」で切っているのは、作者が
シベリアの地に或る心情を籠めているとも解釈できる
が、海を越えて北方の大陸につながる広漠たる秋空の
一角に、今しも鳥の群れが渡って行くのを仰望すると
単純に解しても、一句の景趣は十分にある。もちろん
シベリア抑留を連想する世代には別の感慨を誘う句趣
となると思われる。

道辺の朝顔の種失敬す

みち

「失敬す」の諧諷味が肝である。素知らぬ顔で余所見しながら手でチャッカリと摘み取る情景は微笑ましい。道の辺とあるが、おそらく住宅地の低い垣根で人目を気にしながらの行為であろう、「花盗人」と同じく罪には問われぬ風流な出来心なのだ。

天を突くスカイツリーや鳥渡る

昭七

思えば世にスカイツリーほど深く澄み渡る秋天に、ふさわしいものはない。穹窿のもと広がるメガロポリスから聳立する巨塔の上を渡来する鳥の群来。「鳥雲に」が「鳥スカイツリーに」が秋の新季語になるかも。

みはるかす手賀の田圃を飛ぶ鵜

みち

手賀沼は周囲に広大な田圃と干拓地が一望できる。まさに「見晴るかす」天と地の広がりがそこにある。そこを一羽の鵜が飛んで行く。広大な空間と小さな点のコントラストが生み出す手賀沼らしい秋の情景。

朝顔が実となるまでの恋なりし

幸一

かつて「太陽族」なる語と「一夏の恋」という流行語があった。若者たちの奔放かつ刹那的な恋愛沙汰を指す。朝顔の魅惑的な花の色が失せ、花房も枯れると夏も終りである。まるでそれをなぞったような恋だったという、追懐にはかりそめの恋はすまじという悔いと愁いが纏綿とする。剽軽な口調に複雑な余情を盛つ

た句なのである。

一句鑑賞

光 みち

秋天に樅大樹が枝を張る

高志

樅の枝振りは櫟などと違つて地面に水平に伸びており、下から見上げるとまるで大きな円盤に見える。天辺は秋天を突き抜けて立っているようである。つきぬけて天上の紺曼珠沙華の句に通じる力強い句です。

一句鑑賞

増田陽一

海越えて加賀へ鵜の群来かな

健二

峡の峰鵜の罨を見張る小屋

村老は鵜の美味を倦まず説く

鵜の兼題で懐かしい句を出された健二さん。僕が懐かしいのは若年時、中西悟堂の野鳥記（十六あったらしい）に熱中したからである。秋冷の山峡に霞網を訪れて鵜を焼き、鳥屋の老爺が醸した山葡萄の酒を飲むところ、終戦後の飢餓の中を絶望的魅力で読んだ。泉鏡花にも宿で鵜の焼鳥を一ダース所望した上、更に鍋にして『岩見重太郎のようだろう』と嘯く人物が出てくる。それほど昔は乱獲された。小鳥には無残なので今は当然禁止であるがこれらの句は昔語りの季節感を良く伝えている。「木曾」も本場だけれどここでは「加賀」

の地名が音韻上も決定的かと思う。

実の朝顔垣に絡まる共稼ぎ

高志

「実の朝顔」が、蔓枯れて秋の半ばまで垣に絡まっていたままである。共稼ぎで昼は不在の夫婦の庭に季節だけは移り変わって行くのである。自然は人間の営為には気づかれぬままに推移しているのだなあ、と言うところ。「朝顔」と「共稼ぎ」という、意外な組み合わせが類句のない面白さを出している。

朝顔も實がちに遷東綺譚の町

孝三

玉の井の私娼街という、行つた事はないが荷風を読んだ記憶で実景が想像できる。「旦那・」と聲をかけて女が傘に入ってくるようなところ、朝顔市で買った鉢が未枯れて。この「實がちに」の措辞が素晴らしい。賑はしく来てぼつねんと鶇かな

幸一

大群で渡ってきた鶇が何処で別れるのか一羽づつになり狭庭にまで現れるのが不思議である。他の鶇類もそうである。アトリなどは賑やかに群で囀りながら冬を越すのに。「ぼつねんと」と、独り空を見ている鶇

一句鑑賞

武者昭七

朝顔が実となるまでの恋なりし

幸一

「朝顔が実となる」とは時間のきわめて短いことをいうのであろう。朝顔が花を咲かせ実を結ぶまでの一

夏のはかなく短い恋であつたとなげいているのである。「哀傷」の句である。最初ぼくはそんなふうに決めたかかっていただけでちよつと「待てよ」という気がし出したのは、それにしてはなにか乾いた口調を感じたからだ。哀傷ではなくて「自嘲」ではなからうかと思ひ出したのが現在。ひよつとして「泣き笑い」の句かも知れぬ。だから俳句は面白いんだとひとりたのしんでいます。

みはるかす手賀の田圃を飛ぶ鶇

みち

「みはるかす」の一語が一句の情景をひらけた大きなものになっている。その田圃を飛ぶのは鶇の群れ。北の国からはるばるとやってきたのだ。餌をあさるのだから。豊かな田園風景である。

庭駆ける鶇に朝の光満つ

多美子

「かける」は「駆ける」であらう。句会では鶇の句は飛んでいるのが多かったけれどこの句は地上をかける鶇だ。降り注ぐ朝日を浴びて庭先をびよんびよんと跳ね回る（ペンギン立ち みち）とした句もあつた元気な野鳥の姿は「朝の光満つ」と作者に言わせるほどに感動的なのだ。感動の発見は俳句のいのちであらうとあらためて思う。

檜の実や古人いしえびとを味はえり

敦子

稲作が普及する以前には檜の実などの木の実を常食

とした時代があつたらしい。ここにいう「古人」とはそんな時代の人たち、縄文人をいうのであろう。作者はたまたま樗の実を食べる機会にめぐりあい、それを口にしたとき（どんな味だったかは分からないけれど）を思い出して「古人を味わった」と洒落たのだ。遊びところが楽しいではないか。

朝顔の実に託したる明日かな

興正

明日のいのちの保証は誰にもない。人の世は無常である。それでも人は明日に期待する。朝顔の実を播いて来年もまた会えますようにと願いをこめるのである。ささいなものにも人は願いを託して生きる。

一句鑑賞

飯田孝三

朝顔の実赤紫を封筒に

あさがほと母の細書き種袋（原句）

敦子 紀子

どちらも女性の細やかな情感がこもる。（前句）朝顔の種を空いた封筒に入れて仕舞う。来年もまた花を楽しむのだ。種の色合いは花の色や萎んでからの頃合いで、赤茶けたり、黒ずんだり時には紫と微妙に変わるだろう。手元のそれに目をとめたのである。（後句）朝顔の種を入れた紙か布の袋に残る母の細書きの文字を目にし、恐らくは今亡き母の面差しを睨にするのだ。句会では「種袋」は春の季語とて賛否が割れた。かな

書き「あさがほ」が用字の周到さを覗わせる。

シベリアのつながる空や鵜来る

興正

シベリアの空見返りて初鵜

陽一

兼題句では似た句によくお目にかかる。どちらも候鳥鵜の生息地とシベリア抑留を重ね合わせる。抑留は直に一世紀も前にもなる変事だが、歴史の不条理に対する悲憤はいつしか忘れ去られるものと、時を重ねるにつれ人々の心の底に沈積するものがある。取合せが常套などとは言うまい。（前句）句会ではシベリア「の」に賛否交々、「に」、「へ」いや矢張り「の」などと。く空「や」はやや情が過ぎようか。（後句）さりげなく平談。空を見返るのは鵜、思いは眼前の鵜の眼差しに託して言わない。「初鵜」の名詞止めがはまる。

木犀の樹下秀才を組み伏せり

宏之助

児童取っ組み合いの図。その経緯はともあれ、日頃の鬱憤を晴らしたのである。末尾「せり」の気合いがさわり、木犀は言わずもがな金木犀、匂い立つ花映えの樹下の珍事がほのぼの浮世の俳諧をこぼす。

やや寒の行列にある昼餉刻

興正

「昼餉刻」とあるから、外待ちの飲食店前だろう。作者はその列に立つ、空きつ腹が鳴るのが聞こえるようだ。街中で見かけた光景でもかまわない。誰もが思い当たる体験をもつ。やや寒「の」のひそやかさがい

い。臍である。これが「や」だったら句が壊れるだろう。『「ゐる」で半拍切れる。

俳窓評論纂

＊「軽み」について・中村草田男「万緑」昭和54年8月号に載った神戸に於ける大会講演録を健二さんから貰った。以前本誌で取り上げたものと中身は同じであった。俳句入門にも書かれてあるもの。軽みが芭蕉の晩年の最も高い境地であるから、現代俳句はそこへ戻ってこれを追求していくべきだという時に、ニューチエに対するツアラトウストラの反駁の如く、いずれ皆死んでいくのだからそんな難しいことを考えないでお互いのびのびと楽しめばいいではないかという一種の終末観のようなものが働いていると草田男はいうのです。軽みを全幅的に肯定し従っていくのではなしに、われわれは我々自身の世界をより深く、より永続的な価値の世界に、いのちの世界にしていこう、そこに目を向けていくことが重要だとみなさん考えてほしいと思いますと言って結んでいる。

＊「群像」9月号に平野啓一郎の未公開インタビュー（本誌9月号に紹介）の書評が載った。三島の文化防衛論に顕著な天皇中心の日本論に飛躍した途端、人は困惑せざるを得なくなる。三島の小説は欧米文学の影

響下にあつたし、彼の日本語が「西洋的な思想構造」に学び、言葉の使い方とかなんとかが西洋的であるのは明らかだった。それは決して、「文化的天皇」が象徴する日本文化の「連続性」、「再帰性」にはおさまりきれないものであり、文化の「全体性」という彼の主張するもう一つの特徴も、外国文化に開かれている、などという意味では決してなかった。有名な三島邸にしても、コロニアル様式であり、庭にはアポロン像が建っている。そういう矛盾を、彼の哄笑に紛らされることなく、真顔で問い質し、彼の反動的なナシヨナリズムを中和する質問者が、早い段階でもっといても良かったのではないかと、私はいつもながら考えさせられた。三島は「僕にとつては、僕の小説よりも僕の行動のほうがわかりにくいんだという自信がある」と語る。それ故に、彼の文学を彼の思想、政治的行動から切り離して考えようとする人もいる。しかし、彼の思想、文学こそは、その不可思議の実体としての生の表れであることには間違いない。三島自身が「あれを読んでくれればわかる」という「太陽と鉄」は、筋肉と言葉とを、片やトレーニング器具の「鉄」と、片や書物とを組み合わせて、鍛え、造形し得る外在的な異物として、対照的且アナロジカルに、同格に語ってゆく。三島は両者の均衡と最終的な一致を夢見つつ、その無理

まで既に予感していて、全体に明晰だが、混沌としており、その暗い情念のレトリックに充ち満ちた文体には、異様な迫力がある云々。

*ひろし先生の「富士山百句」が出版された。携帯句帳の大きさの季節ごとに編まれた渾身の百句である。終の棲家に決められた富士市に越されて三十年毎日富士山を眺めて暮らす生活と好きな山遊びで富士山の周りに足跡を残されて成ったものだ。富士山をただ眺めて作った句だけではない。歩いて体験されたものでなければわからないだろうと茸狩などを書かれてある。彩雲となる初富士の雪煙

春雪は天女の膚富士高嶺

富士裾野野火がうがうと誓子逝く

誓子忌の富士を誓子として仰ぐ

八十八夜富士笠雲を撥ね上げて

富士霞む宝永山の高さまで

禊池噴けるは富士の雪解水

静止する霧なし富士の大斜面

外人の脛の金色富士登る

お頂上銀河はつきり星はつきり

火祭りの火の道富士へ一直線

茸狩御庭奥庭雲の上

など皆誓子流の強い句が並んでいる。(つづく)

*すえひろ句会交友記(本阿弥秀雄著)を宏之助さんより貰った。宏之助さんの句を抜いてみた。

胸に背に赤児を括り火を渡る

佐藤宏之助

紙漉場真つ赤なジャッキ置かれあり

〃

寒肥の湯気立ち登る桃の里

〃

浚渫を終へて舳先に松飾る

〃

廃村の桑の根つこに雪積る

〃

道元さま榎櫓を一つ盗みます

〃

飛行距離長し筑波のはたはたは

〃

滑る滑るあめんぼううには水の靴

勝又民樹

尺取が攀づ天平の丸柱

佐藤宏之助

通り抜け落花はすべて銭に見ゆ

〃

さくらより離れて隠れ煙草吸ふ

〃

涅槃哭く迦陵頻伽は尾を立てて

〃

あめんぼうとみずすましは違うと大論争になったとか聞いたので勝又民樹氏の句を載せた。「水馬水を掴みて流れゆく」(高志)「映りある日の真中に水馬」(〃)は漢字で書いたのであめんぼうと読んで選ばれたのか、誓子先生はみずすましと発音されていたが。

受贈誌(H 29年10月号)

注連縄は大蛇のうねり神集ひ(彩137号) 平野ひろし

宍道湖に鴨浮く八百の神よりも(〃)

〃

社家町の昼しんかんと神集（一）

抛りたる早苗に燕宙返る（二）

墜ちし子へ餌をせつせと親燕（三）

敗戦忌蜻蛉赤き隊を組む（四）

風向計土用太郎の唸り出す（五）

工場内通り抜けゆく秋通路（東京ク10月）

雲間より稲田黄金の見え隠れ（六）

叢の売地看板ざす鳴けり（七）

寝ねがての真夜秒針に秋の声（八）

選鉱婦の揃ふ合服雁渡し（九）

英蓬がますみの花揺らす風日は西に（あすか十月）

こだま

森林浴檜ひのき 翠檜あすなろ 樵きざわらの気（彩137号） 光成高志

山尾かづひろ吟行ノート（H29・10.3）

郁子の実の色づくかたへ立ち話

栗を剥く後ろ姿はまるで猿

更待月LEDの町眠る

賢治童話 銀河鉄道の夜

武者昭七

—銀河の「穴」とは何か—

銀河鉄道のなかでジョバンニがカムパネルラと出会う場面はつぎのように語られる。（すぐ目の前の席にぬ

〃

平山三郎

〃

河端不三子

杉山晃美

守啓

栄

晴夫

璃子

万世遊

山尾かづひろ

れたようにまっくらな上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。そしてそのこどもの肩のあたりが、どうも見たことのあるような気がして、そう思うと、もうどうしても誰だかわかりたくてたまらなくなりました。・・それはカムパネルラだったのです。」

「ぬれたような真つ黒な上着」とはカンパネルラの水死を暗示しているように不可解なのは「みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった」というカムパネルラのことばだ。ザネリはカンパネルラと一緒に銀河が鉄道に乗りたかったのだろうか。しかし銀河鉄道には死者だけがのれるのだ。ジョバンニはただ水死事件のことは知らないから無邪気に「どこかで待っているよ」と答えるけれどカムパネルラは「ザネリはもう帰ったよ。お父さんが迎えに来たんだ」とそっけない。ふたりの会話や気持ちがいまぐれかみ合わないのは生者と死者の会話だからだろうか。会話や気持ちのすれ違いは「銀河鉄道の夜」という童話の各所にみられるものだけれどこれが作品に寂しい影を産んでいる。それはふたりの関係のさびしさだ。

だれもカムパネルラの死を確認したものはいない。読者にカムパネルラの死を突き付けるのは父親の「も

う駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」という言葉だけだ。けれど、この言葉は科学的な根拠をもっているにせよ自分の子供に対する言葉としてあまりにも冷たすぎないか。父親がすぐにジョバンニの父親の消息に話を移してしまうのは平静を保とうとするための偽装か、ジョバンニの境遇に対する配慮からか。

もうひとつ気になるのは現場に母親の姿がないことだ。「おっかさんは、ぼくをゆるしてくださるだろうか」というカンパネルラのこだわりようとはずいぶんかけはなれてないか。「きみのおっかさんは、なんにもひどいことじゃないの」というジョバンニの語りかけにしたがえばカンパネルラの母親は無事健在である筈なのに。そしてぼくらは意外な場所でカンパネルラの母親に出会う。銀河鉄道の終点近く、ぼんやり白くけむっているあたりのきれいな野原だ。「あすこがほんとうの天上なんだ。あつ、あすこにいたのはぼくのお母さんだよ。」とカンパネルラは叫ぶ。そうだとすればカンパネルラには二人の「おかあさん」がいることになる。町に住む現実のお母さんと天上界にいるおかあさんだ。この不思議をとくために天上の母親を「前世の母」とか「後世の母」とかすることがあるけれど、ひよつとしたら死者の目にだけ見える「幻影の母性」、カンパネルラにとっての「永遠の母性」かもしれない。

銀河鉄道は死者の乗り物だからジョバンニはいつまでも乗っているわけにいかない。二人に決定的な別れがやってくるのはその直後である。△あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ」カンパネルラが少しそつちを避けるようにしながら天の川のひととを指さしました。ジョバンニはそつちを見て、まるでぎくつとしてしまいました。天の川のひととこにおおきなまつくろい孔が、どおんとあいているのです。その底がどれほど深いか、その奥に何があるのか、いくら目をこすつてのぞいてもなんにも見えず、ただ目がしんと痛むのでした。△

孔や谷はそこを越えれば「異界」として賢治の作品にしばしば登場する。「孔」とはあい異なる二つの世界を結ぶ通路である。天の川の一角に口をひらいたこの深く昏い孔はどこに通じているのだらう。死者の行きつく先が「冥府」と呼ばれている場所だとすれば「カンパネルラはここで銀河鉄道を乗り捨ててそこへおもむかなくてはならない。カンパネルラの行く場所が後世と呼ばれる世界か、前世と呼ばれる世界かそれはわからない。△カンパネルラ、僕たちいっしょに行こうねえ」ジョバンニがこう言いながらふりかえってみましたら、そのいままでカンパネルラの座っていた席にもうカンパネルラの形は見えず、ただ黒いびろうどば

かりひかっていました。」とだけ賢治はいう。

お便り広場（到着順、敬称略）

加入一年目の偶感を書いてみました。結社仲間裡の私話を載せない方針は承知していますので、掲載可否は遠慮なく、お任せいたします。

十三冊目の「白金葎」先週のオープンカレッジで、主宰から出来たての九月号をもらった。私にとり加入満一年、十三冊目の「白金葎」である。僅か20頁の眇たる小雑誌とはいえ、私には「群像」や「新潮」、「文学界」の新作に遙かに優る存在感と魅力がある。巨大な異形葎の表紙が宝石のように輝いて見えた。これを毎月、きちんと刊行しているのは驚くべきことである。私も小さな同人誌を刊行したことがあるが、いかに大変なことかよく分かる。それを平気な顔でやり遂げる、強靱な編集能力には、三嘆する。生来の文人肌に加えて技術研究者の緻密さと企業実務者の堅実な運営能力が背景にあるにちがいない。もともと誓子門で長く研鑽を積んできたとはいえ、源氏物語、芭蕉や菅茶山、鴎外まで視野に収め、俳諧の源流と正道を追求し、とくに三島由紀夫ランドの限らない魅惑を語る。こんな地方俳人はそうそう居るものではない。「白金葎」の句会に出て、同人のいずれも実力派であることが初學者

の私にもよく分かった。これは共同創造の芸術である俳句に入門しようという私にとって、じつに大きな意味があることだった。仲間に恵まれることが最も大切なのだ。選句と作句が直結し、鑑賞が創造でもあるという運座の有り様は、小説など散文の同人誌の自我主張の世界とは全く対極的で、新鮮だった。批評と創作が一元的という短詩型俳句。オタク的性癖の私は、どっぷりこの世界に嵌まってしまった。数ある俳句結社の中で、よくぞ白金葎に加入できたと自らの幸運をしみじみ感じている。思えば、たまたまオープンカレッジの源氏物語のクラスで、主宰と同席したことが機縁だった。初日に先着した私が、先輩の定席を平然と占領したのに、苦笑して隣席に座った。その主宰と話を交わす内、白金葎に誘ってくれたのであった。（10.7健二 拝啓 めっきり涼しくというより肌寒くなつてまいりました。本日（十月五日）白金葎九月号届きました。また別途先日句会の写真も戴いております。たまにしか参加できませんが、毎回皆様の佳句に接し又貴重なお話をうかがうことができ有意義な時間を過ごさせていただいております。深く感謝いたします。今後ともよろしく願ひいたします。敬具（9.10半寿） 光成高志様 秋冷の候びつたりの日となりながら二十六度を越せば長袖がうるさくも感じられます。さり

ながら、その一番寒いと思った朝二匹の老猫にせかされて掘りこたつに電氣を入れ布団をかぶせての炬燵開きとなりました。これから半年、電話の音や来訪者のピンポーンの度に足にからまる炬燵布団で閉口の日々が続きます。今月の高志さんの駒場吟行の記 とても興味深く拝読、neuronを英和辞典で調べたり、もう十一時と云うのに目がパッチリしました。ケルネル*田圃は多分人名を冠したものかと思いますが、スペルが解らずKかChかQか辞書も引けませんでした。学生に逢ってはなしでもしましうとおっしゃったそのことが今の世にさわやかで嬉しいこと、お人柄によるものと改めて感じました。手紙の冗長、申し訳ありませんが、私共仲間の作家の句に「かはたれ時」を中七に使ってありました。聞いたことなく早速調べました。

①彼かは誰たれで②誰たそ彼かれえ何れも夕方明け方のうすぼんやりの中で用いいつの頃からか①は明け方は②は夕方と分けるようになつたそうですが、実際には何れも夕方に用いているらしいと思います②は普通に通にたそがれ（黄昏）と云うように思います、いかがでしょうか。編集後記のご不快、ごもつともです。代表してお詫びいたします。私は保守ですのどてつもない句には迎合できません。人生はとても大変、卒寿までいきのびて来し方を思うとまだ大変の中にうろ

くして終止符打ちたしと思いますが、私よりはるかに若いのですからやり残したことがあるなどとおっしゃらず仰せのとおり氣力を新たに頑張つて下さいませ。この手紙誌上にお出しの場合は適当につまんで下さいますようお願いいたします。お体をお大切にいつも氣にいたしております。

10.8 夜 璃子

（*オスカル・ケルネル（Oskar Kellner 一八五一〜一九一））
みちさま ことしの変な暑さのためか去年山ほどの柚子が生りましたが今年三個こんなことであるのでしょうか。桜タデ（大犬タデ）もさんざん虫に喰われ大木？にならずじまいでした。鉢植の一才ザクロは三個の実が赤くまだ口を開きません。秋を楽しくお元氣でおすごし下さいませね。

10/8 璃

秋も深まり朝夕肌寒さを感じる季節となりました。白金霞9月号届きました。7月に案内を貰っている法隆寺参拝の件先日ミサ子宅へ訪問して聞きました。高ちゃんから前に案内をもらっています。妹達には前に言っておきました。まだ確認はしていません。案内にあった時間に合わせるように皆に言っておきます。又近いうちに確認して連絡します。秋の取入れ時でちよつと忙しいがまあそれはそれで私は参加します。現状のままなら明日の日は分らない歳になつてしまいまし

た。
(10.12 健三)

前略 白金蔭 10月号掲載の句稿ならびに半期分
(10月3月)の会費を同封いたします。ご査収下さ
い。なお、お手数ですが、句会の互選点数をご教示く
ださい。小生の分だけで結構です。掲載誌に同封いた
できれば幸いです。 草々 (10.14 興正)

秋もこの長く続краしい雨で冬への道が早まりそう
に思いますが、お体調いかがでいらつしやいますか。
秋明菊ほととぎすに早咲き椿の「西王母」が雨の中地
味に咲いておりますの。十月は何やら多忙で猫が病院
に行くようなことがあったりで、落ちつかず、ゆっく
りと句を楽しむ秋の夜と云うことが訪れません。小山
さんのことも気にかゝりつゝとりあえず東京クラブ会
報はお送りしておりますが、「ガンバル」は良い言葉で
はないように云われますが、やはり良いと思いますの
で、お体にお気をつけながら「白金蔭」頑張つて下さ
い。 (10.17 璃子)

光成様 お休みばかりで本当にごめんなさい。体力
がなくなり我ながら情けないのです。ご迷惑と思いま
すが投句をさせて下さい。 (10.20 紀子)

光 みち様 Happy Halloween !! お化けも驚く
サプラズの㊦嬉しく、ありがとうございます。(Oct.31 2017)
昨日、一日のお天気で今日は続く冷たい雨降りの

日々の始りとなりました。このたびは楽しい秋便りと
数々のお心のこもったギフトがレターパックで到着
(以下中略) 何十年も過ぎた昔、妹と木曾へ行つたこ
とがあり、その時の句、自分でももうろ覚えですが、
明け易き木曾の美林のさびしさに 璃 (10.23 璃子)

があります。(以下略)
十月の一句鑑賞の駄文を右のとおりお届けします。
お手数をかけますがよろしくお願いいたします。異常
気象下、秋冷が募ります。ご夫妻共々御身お大切に
清吟下さい。 (10.23 孝三)

我孫子日記

9/22	例会
9/27	SOA (2)
9/30	* 体育祭
10/4	SOA (3)
10/7	*2 上松
10/8	*3 森林浴
10/10	病院
10/11	SOA (4)
10/17	*4 野田
10/18	SOA (5)
10/20	例会

*体育祭玉入れの玉届かざり 高志

体育祭白組白の旗を振る //

*2 乗り継ぎて木曾平沢の秋時雨 高志

薄紅葉寢覚の床の屏風岩 //

溪谷へ下りて上り秋暮るる //

山牛蒡の実の色の良し房垂らす みち

いりあいの蜂の群がる野菊かな //

*3 飛行機雲はらけて鯛雲と化す

高志

秋澄むや朝日差し込む開会式

合体の鼠子と檜紅葉山

〃 〃

バス上る溪流沿ひの紅葉道

みち

紅葉して紅金縷梅は小花付け

〃

紅葉来て呑曇淵の川渡る

〃

*4 秋雨や醤油の匂ふ野田の駅

みち

秋時雨板壁長屋門閑か

健二

秋霖や鼻高く猿田彦うそぶけり

〃

秋霖や猿田彦像富士塚と

高志

秋微雨猿田彦像高々と

みち

編集後記

白金霞創刊の言葉を何故か思い出した。M9.0という大地震に見舞われたのは六年前、平成23年^{3.11}である。芭蕉、鷗外、誓子、嘉久みな逝去の後に大地震が起こっている不思議を書いている。本誌創刊もおこがましく書くところの地震の一週間前であった。天災に見舞われ続けている日本人は、大和心を育み、又外国の文化や圧力によって眼覚めさせられたのだ。自然をありのまま受け入れて、造化に従って四時^{しいじ}を友として生活して行きたいと思います。日々の生活を大切に、その中に季節を感じつつ、季節感を俳句に定着させた

と思います。その際、やはり誓子先生の教え「自然の物を写生し、物と物との結合を把握し、その物を客観描写によって季節感を詠う。これが芭蕉から現代に伝わった正統俳句である」という言葉が脳裏を離れません。その季節感、生活感を共有する場として、この白金霞なる小誌を作成します。そしてできれば、自然のありふれた素材に深い意味を見出し、さらにその物と季語との新たな関係を見出して、季語の本意に格上げする努力をしたいと存じます。これが私の創刊の言葉です。今読み返すと随分気合が入っている、又結構難しい問題を課していると思います。誰かに教えようとか、人を増やそうかという気はありません。独立独歩で進もうと思っています。今後はメールとかSDとかUSBで原稿をお寄せ下されば助かります。

白金霞 10月号 (通巻第八〇号) 平成二九年一月二七日発行
編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・一一一九 我孫子市南新本二四一七
☎・fax 〇四―七二八七―一〇六八 表紙の題字…加納綾女 同写真は一〇月二六日の白金霞